

1 高句麗による倭国偽使

倭国が高句麗とともに東晋に外交使節を派遣したという記録がある。
是歳、高句麗倭夷及西南夷銅頭大師並献方物。

『晋書』安帝本紀・義無九年条

これだけの史料では、どのような貢物を献じたのかがわからないが、『義照起居注』という皇帝の日常の動静の記録には、次のようにある。

倭国献紹皮人参等。詔賜細笙・麝香。(『太平御覧』所引)

この史料を、岡田英弘は

広開土王の死とともに、高句麗と倭国の間に和解が成立したらしく、翌 413 年、高句麗王高璉の使者と倭国倭讚の使者が連れ立って、東晋の朝廷を訪問した。これは、高句麗にとっても、倭国にとっても、南朝との通交の最初であった。1

と解説している。しかし、熊谷公男は

413 年に倭国の使者が高句麗使とともに東晋に入朝したという記録もあるが、これには内容的に不自然な点があり、どうも高句麗が倭人の捕虜を使者に仕立てて、倭国が高句麗の配下にあるようにみせかけたものであるらしい。2

と記し、ここで言う「不自然な点」とは、

ここでは倭国がテンの毛皮とニンジンを献上したとする。テンは北海道から朝鮮半島北部・シベリア、さらにロシアに生息範囲が広がっている。(中略) ニンジンは薬用の珍品として扱われた朝鮮人参を指す。その原生は朝鮮半島からロシア沿海州にかけてである。いずれも日本列島の原産とは考えにくい品であり、逆に高句麗はその産地としてきわめて理解しやすい。3

熊谷は「倭人の捕虜を使者に仕立て」た「倭人捕虜説」を言っているようだが、河内春人は、「共同入貢説」にも「史料誤引説」にも与せず、「倭国使捏造説」を説く。

70 年ぶりとなる 413 年の高句麗の東晋への遣使、東晋に好印象を持たせ、かつ高句麗が敵と認定した倭国を連行したように見せかけることで、高句麗が東アジアの大国であることを認識させる目的があったと考えられる。それゆえ、高句麗が献上品を準備し、東晋に対して倭国使を捏造し、それを通して細笙・麝香を授かったのであろう。そうであるとすれば、これらの賜物も高句麗が東晋に求めた可能性も考えられよう。4

と述べ、その理由を次のように推測する。

カリスマ的な広開土王の死去という状況のなかで、新王である長寿王がそれまでとは異なる新たな外交関係を樹立することで自らの権威を国内外に示そうとしたものであろう。5

そのうえで、その背景に華北の遼西に割拠していた北燕という王朝の動向に触れ、

北燕は407年に高句麗人の子孫である高雲が建国した国である。(中略)高句麗系の政権で利害をともにしやすかった北燕が非高句麗系に転換したことによって、高句麗が神経をとがらせていたことが推測できる。長寿王は東晋と外交関係を結ぶ事によって北燕との対立というリスクへの対策を取ったといえる。6と推測し、

中国の遠方の国が中国に朝貢する際に、その交通路上にある別の国が介在することを重訳という。中国に接していない遠方の異民族が中国に隣接した国・民族を媒介として来朝することを「訳を重ねて」到来したのものとして、中華思想に基づいて理解する。7

ことを援用し、「倭国使捏造説」を説いている。

2 倭王讚の外交政策

420年に東晋は滅亡し、宋が建国した。武帝劉裕は征夷将軍高句麗王を征夷大将軍に、鎮東将軍百濟王を鎮東大将軍に昇格させた。このことは、高句麗や百濟を外国ではなく宋国内の将軍と同列に扱ったことを意味する。

翌421年、宋の武帝は倭国に対して次のような詔を發した。

倭讚は万里の遠くから貢物を修めた。その真心を褒めたたえるべきである。よって官爵を授ける。(『宋書』倭国伝)

この詔から倭国の使節が実際に宋に到来したこと、その王は倭讚と名乗ったこと、貢物献上に対して官爵を授かったことがわかる。

では、讚はなぜ421年に遣使したのだろうか。

421年の朝鮮半島情勢は、高句麗は長寿王が在位している。百濟は親倭国的政策を堅持していた腆支王が亡くなった後であり、息子の久不辛王が即位している。新羅は高句麗重視の外交を展開している。

讚の東アジア参入は、宋が高句麗や百濟との関係強化に動いたことに刺激を受けたと考えられる。詔勅の中で、宋は「倭讚」と呼び掛けている。「倭」は国名ではなく姓であり、讚は名前にあたりと明らかにされている。一文字の名乗りは百濟からの影響であるが、わざわざ王の名を一字のみで書き表すのは四世紀後半から五世紀にかけて高句麗・百濟・倭国が行った特殊な名乗り方である。この三国が中国を意識しながら、同じルールの中で競い合ったのが五世紀の東

アジアの国際状況である。宋王朝開基という新たな国際情勢に出遅れて参入した倭国が、特にそれを意識していたと考えられる。

「讚」は「褒めたたえる」「明らかにする」という良い意味を持つ好字である。中国は周辺諸国を夷狄として蔑むので、その国名や人名に漢字を当てはめる場合、好字を用いない。(例「邪馬台国」「卑弥呼」)このことから、倭国が自ら「讚」という漢字を選んだということが推測できる。

讚は宋から倭国の王として認められ、冊封を受けて官爵を賜ったが、具体的な爵名についての資料は残されていないのでわからない。しかし、讚が425年に二度目の派遣をした使者の名が、司馬曹達であったことから推測はできる。司馬は將軍の幕僚として設置された官職であるので、讚は国王とともに安東將軍も授与されたと考えられる。

卑弥呼は239年に「親魏倭王」の呼称を得ているが、讚は「倭国王」に改められている。「王」号は中国と地理的に近く、それゆえに密接な関係にある周辺国、特に軍事的協力が期待された関係国に授与された。これに対して、「国王」号は遠隔地の通交が限られた国に授けられた。倭国自体が高句麗のさらに先にある遠方の地であるという地理的認識に加えて、150年以上の時間的空質的な貢献を期待しない「国号」を授与したと考えられる。

各国の王に授与された將軍号は、高句麗が征東、百済が鎮東、倭国が安東である。高句麗と百済は大將軍として優遇されている。それは宋の位置づける現実的な国際的秩序が、高句麗、百済、倭国という重要性の順序であったことを意味している。

宋から將軍に任じられることで軍府を開き、その幕僚たる府官を任命するシステムを府官制という。將軍府が宋皇帝の權威のもとに設置され、宋への朝貢は將軍府からの報告という側面があったことも意味している。

讚は対宋外交開始という東アジアの国際世界への参入によって、倭国王・安東將軍という中国官爵を得た。中国の統治技術の粋を集めた官僚制の一端に触れるということであり、先進的な中国の支配システムを導入することが可能になった。將軍府という統治機構の出現は、倭国の権力機構の整備への第一歩として、日本史のなかで大きな意味をもつ。

- 注 1 岡田英弘 『倭国 東アジア世界の中で』 P135
2 熊谷公男 『大王から天皇へ』 P65
3 河内春人 『倭の五王 王位継承と五世紀の東アジア』 P36
4 同 上 P41
5 同 上 P40
6 同 上 P40
7 同 上 P19

参考資料

- 岡田英弘 『倭国 東アジア世界の中で』 中公新書 1977 年
沈仁安 『倭国と東アジア』 六興出版 1990 年
熊谷公男 『大王から天皇へ』 講談社学術文庫 2008 年
監修田中俊明 『日本・中国・朝鮮 東アジア三国史』 日本実業出版社 2010 年
河内春人 『倭の五王 王位継承と五世紀の東アジア』 中公新書 2018 年